



## 東南アジアの地誌

佐賀県立塩田工業高等学校 高橋 武

### ウォーミングアップ!

2016年4月14日、16日の熊本県を震源とする一連の地震では、震度7を2回観測した。そのなかでも、4月16日未明に発生したいわゆる本震では、家屋が倒壊し大勢の方が亡くなったが、就寝していた筆者自身も「まさか」という気持ちが大きかったことを覚えている（筆者が住む佐賀では前震震度4、本震震度5強であった）。この地震への記憶が新しいこともあり、設問1（3）では自然環境と災害に関する問いを設定した。

2004年12月26日午前7時58分（インドネシア西部時間）に、スマトラ島北西沖のインド洋を震源とするマグニチュード9.1の海溝型大地震により発生した大津波は、インド洋沿岸のインドネシアやタイ、スリランカなどのアジア諸国、ソマリアやマダガスカルなどの東アフリカ諸国にまで押し寄せ、死者・行方不明者が22万人をこえる大惨事となった（震源地は地図帳p.24で確認できる）。以前からひんぱんに地震津波が発生する太平洋では、津波早期警報システムが構築されていたが、インド洋では整備が遅れていた。また、地震発生後の津波からの避難がほとんど行われなかったことが、多くの死者を出した要因とされている。写真1はタイ南部マレー半島のインド洋沿岸の都市カオラック近郊に船がうち上げられたようすである。この写真をみると、気仙沼の光景を連想させる（筆者は、東日本大震災発生から数週間後、九州から車で被災地に向かい、三陸沿岸の国道45号を南下、石巻市の災害ボランティアに参加した）。津波が押し寄せるテレビの映像や、陸上に大型船、建物の屋上に車など日常生活では考えられない光景をまのあたりにして言葉にならなかったことを記憶している。単に災害を恐れるだけではなく、生徒の地理的思考力を養い、生きる力を身につけさせることが地理教員の役割であり、それが津波防災の一助となると考える。

写真2はフィリピン、ルソン島南部にあるマヨン山の写真である。フィリピンでは1991年6月に大噴火したピナトッポ山が有名であるが、マヨン山も噴火を繰り返しており、直近では2014年に噴火している。日本においても、1991年6月に大火砕流を起こした長崎県の雲仙普賢

岳、2014年に噴火した御嶽山など、ともに新期造山帯に属するフィリピンと日本は同じ境遇にある。

### ステップアップ!

東南アジアでは季節風（モンスーン）を利用した稲作、植民地時代からのプランテーション農業が農業の中心となっている。おもな稲作地域はインドシナ半島のデルタ地帯であり、山がちなインドネシアやフィリピンでは多くの棚田がみられる〔ルソン島北部にある世界最大級の棚田群「フィリピン・コルディレラの棚田」は世界文化遺産に登録されている（地図帳p.23）〕。このほかにインドネシアとフィリピン両国の共通点を3点あげると、1点目は先述したように火山が多い点。熱帯に属している割に、米を生産できるのは、古い火山灰起源の肥沃な土壌であることも影響している。また、2点目には、緑の革命によって高収量品種の米を積極的に栽培している点。その結果、米の自給率が向上した。3点目に、マクドナルドのセットにはライスがついている点。ある意味、日本以上に米文化が浸透している。フィリピンにはミリエングという午前と午後に関食をとる食習慣がある。フィリピン発祥のファストフードチェーンであるジョリビーではフライドチキンとライス、スパゲッティのセットが人気メニューであり、食欲旺盛なフィリピン国民で終日にぎわっている。ちなみに、米の輸出量世界第1位の国といえばタイであったが、各国それぞれの政策により、2013年にはインドが世界一の輸出国となっている。

天然ゴムは20世紀はじめの自動車産業の発展によるタイヤ需要の増加などをきっかけに生産が急増した。合成ゴムが普及した現在でも、安定した需要があるため、天然ゴム生産量は、タイ、インドネシア、マレーシアの3国で世界全体の65%を占めている（ちなみに2013年の世界の天然ゴム生産量は1197万t、合成ゴム生産量は1547万tであり、ともに生産量を増やしている）。

マレーシアでは19世紀末に、イギリス資本とインド労働者による天然ゴムの大規模農園がマレー半島で開発され、東南アジアにおける主要生産地域となっていた。しかし、ゴムの木の更新時期を迎えたのをきっかけに、油やしへの改植が進み、現在では油やしの経営面積が大き

く上まわっている(図4)。近年、マレーシアやインドネシアでは熱帯林を無秩序に伐採したり焼いたりすることにより、油やし農園を拡大していきっており、シンガポールでは海をへだてたスマトラ島からの煙による煙害に悩まされている。

東南アジアの食文化にココナッツは欠かせないが、健康や美容の面で、近年世界的な流行となっているコブラ油(ココナッツオイル)が、日本でもテレビや雑誌で紹介されてから、スーパーマーケットや通販などで大人気となっている。若いココやしの実に入っている液体がココナッツジュースであり、実が熟すとココナッツジュースやココナッツミルクだった胚乳の部分が固まり、それをしぼるとコブラ油がとれる。コブラ油の世界生産量の4割弱(2013年)を占めるフィリピンには、ココナッツ庁という政府機関があることから、フィリピンにとって重要な産業の一つであることがわかる。ちなみに、20年以上前に流行したナタデココはココナッツが原料であったり、100年以上の歴史がある亀の子東子西尾商店の亀の子たわしは、スリランカ産のココやしの実からつくられていたりココやしは意外と身近な存在である。

また、フィリピンといえばバナナもなじみ深い。日本のスーパーマーケットにならぶバナナのほとんどがフィリピン産である。ひと昔前には台湾産バナナが多かったが、日本への輸出用のバナナ農園がミンダナオ島につくられてからはフィリピン産が増大した。しかし、報道されているように、新パナマ病によって多くのバナナ農園が壊滅的被害にあっており、バナナの価格は上昇の一途をたどっている。

外来文化の影響を受けてきた東南アジアは、さまざまな宗教が信仰されている。設問3(4)では、イスラームに関する問いを設定した。東南アジア諸国には多くの日本企業が進出しているなかで、日本の飲食店も数多く出店している。ムスリムが多いマレーシアやインドネシアで出店し、ムスリムの人々に安心して食べてもらうには、ハラール認証を取得することが不可欠となっている。マレーシアは、どこで、どのようにして製造されたかなどといったハラール認証の審査が最も厳密な国の一つといわれている。そのため、マレーシアでハラール認証を取得できれば、世界16億人超のイスラーム市場進出へ大きく前進できるということで、ぞくぞくと企業が進出している。

### ジャンプアップ!

東南アジア各国の発展は著しい。古くからの中継貿易

の地シンガポールをはじめとして、ほほえみの国タイ、ブミプトラ政策とルックイーストを掲げてきたマレーシア、人口2.5億のインドネシア、平均年齢が低いフィリピン、ASEAN後発国のベトナム、ラオス、カンボジア、そして民主化したミャンマーなどまだまだのびしろのある各国である。

イギリスの旅行雑誌『ワンダーラスト』による満足度の高い観光地1位(2015年)になったのはラオスのルアンパバーンであった。日本人にはなじみが薄いですが、王都として栄え、メコン川が流れる市街地全体は世界遺産に登録されており、近年外国人観光客が急増しているという。このラオスやタイ、カンボジア、ベトナムにはメコン川が流れているが、日本のODA(政府開発援助)によって、多くの橋がかかった(カンボジアの新札にはその橋や車、日本の国旗などが描かれている)。この結果、インドシナ半島内の輸送時間の大幅な短縮、物流量の増加、地域経済の発展に寄与するものとなっている。それをより加速させるものが、2015年12月31日に発足したASEAN経済共同体(AEC)である。すでにASEAN原加盟国を中心に、関税の撤廃や域内分業が進んでいたが、ASEAN後発国にも、域内の関税の撤廃や専門労働者の移動の自由などが段階的に進むこととなる。今後は急速な発展とともに、賃金の格差による労働者や生産拠点の移転といった問題などもでてくるだろう。

設問4(5)に関して、筆者が住む佐賀県では、タイからの観光客が急増しているが、タイの有名俳優や撮影スタッフが来日し、佐賀でロケをした複数のドラマがタイで放送されたことが影響しているという。ロケ地になった祐徳稲荷神社(佐賀県鹿島市)のおみくじは、日本語、英語、中国語、ハングル、そしてタイ語で書かれているほどである(写真8)。また、経済発展によってある程度豊かな生活を送れるようになった東南アジア諸国に対してビザ発給の緩和(マレーシアとタイからの短期滞在であればビザ不要など)が行われていることもあって、訪日外国人観光客数が急増している(図9・図10)。

近年、外国人観光客の姿をいたるところで目にするようになった。そのなかで、イスラーム諸国からの訪日者も増加していることもあって、商業施設や公共施設に礼拝所が設置されたり、日本でもハラールという言葉が徐々に浸透したりしてきている。日本とそれぞれの国・地域の宗教と生活・文化などの比較を通して、生徒にはこれらを身近な事柄として、楽しみながら考察をしてほしい。